平成 30 年度

国指定史跡「向羽黒山城跡」

歴 史 講 演 会

日時　平成 30 年 12 月 16 日（日）　午後 1 時 30 分 開会

場所　会津美里町　本郷公民館　大会議室

次　第

１．開会

２．主催者挨拶

３．講師紹介

４．講演

演題：「向羽黒山城跡と蘆名氏」

講師：垣内（かきうち）　和孝（かずたか）　先生（公益財団法人 郡山市文化・学び振興公社）

５．閉会

2018年12月16日　会津美里町講演会

向羽黒山城と蘆名氏

垣内 和孝

はじめに

〇位置とかつての認識。

場所：福島県大沼郡会津美里町。南から北へと会津盆地に突き出た白鳳三山の岩崎山に築城。東側に大川（阿賀川）が北流し、西側に下野街道が通る。…… **図１**

立地：羽黒山信仰の霊山。

築城：永禄４年（1561）開始。「新編会津風土記」「巌館銘」。
永禄６～７年（1563～64）、蘆名盛氏から嫡子盛興へ家督譲渡。
永禄11年（1568）完成。盛氏が移る。「隠居城」認識。「会津鑑」。

廃城：天正２年（1574）。盛興が他界し、養子盛隆が家督相続。盛氏は黒川城へ戻る。「新編会津風土記」「会津鑑」（ただし両書とも盛興他界を天正３年と誤記）。

〇1980年代後半から90年代の研究の深化によって、性格や築城・廃城についての認識が変化。

〇2001年に国指定史跡。【平成13年８月７日「官報」文部科学省告示第134号】

築城・改修・廃城について、「蘆名氏の全盛期、一六世紀中ごろの永禄年間に盛氏によって築城され、慶長期まで戦国大名の蘆名氏、伊達氏、豊臣大名の蒲生氏、上杉氏によって改修と拡張整備が繰り返され、関ヶ原の戦いの一環で上杉景勝が徳川家康に敗北した慶長五年（一六〇〇）に廃城になったと推定される」と具体的に述べた上で、「向羽黒山城跡は、一六世紀中ごろに戦国大名蘆名氏の軍事拠点として築城され、領国支配の拠点となった山城跡である。一六世紀末の廃城まで拡張整備、改修が継続され、当該期の築城技術の変遷が良好な遺構として残されている」ことを指定の理由として上げる（文化庁文化財保護部「新指定の文化財」『月刊文化財』第430号、1999年）。

〇2003年以降、発掘調査が行なわれ多くの成果。→ 再検討の必要性。

１．問題の所在

調査成果と研究史

〇調査報告書など〈近年の成果のみ〉

会津本郷町教育委員会編・発行『向羽黒山城（岩崎城）跡保存管理計画書』1995年。
（小林清治・大石直正・西ヶ谷恭弘・市村高男氏等の論考所収）
会津本郷町教育委員会編・発行『向羽黒山城跡Ⅰ～Ⅲ』2003～05年。
会津美里町教育委員会編・発行『向羽黒山城跡Ⅳ～Ⅴ』2006～07年。

〇報告など〈口頭報告含む〉

梶原圭介「会津美里町向羽黒山城跡―葦名氏の本拠―」柳原・飯村編『中世会津の風景』高志書院、2007年。
梶原圭介「向羽黒山城―謎の巨大山城―」まほろん15周年シンポ「城跡研究のいま」2016年。

〇論考など〈管見に触れた範囲 一般書・事典類含む〉

佐藤健郎「向羽黒山城」日本城郭大系第３巻『山形 宮城 福島』新人物往来社、1981年。
＊村田修三「岩崎城」村田修三編『図説中世城郭事典』第１巻、新人物往来社、1987年。
＊西ヶ谷恭弘「若松城の南に位置する巨大な山城 向羽黒岩崎城」
『戦国の城 下巻 中部・東北編』学習研究社、1992年。
＊市村高男「城郭史における向羽黒山城（岩崎城）の意義について」『保存管理計画書』1995年。
向羽黒山城跡検証事業実行委員会編・発行『解説 向羽黒山城（岩崎城）跡』2000年。
（小林清治・石田明夫・高橋充氏等の論考所収）
石田明夫A「東北南部における戦国期の城郭について」『福島考古』第42号、2001年。
高橋　充「向羽黒山城と『巌館銘』 ―戦国の城を詠った漢詩文―」
小林清治編『中世南奥の地域権力と社会』岩田書院、2001年。
＊石田明夫A「中世の城と館」会津若松市史３『会津葦名氏の時代』会津若松市、2004年。
＊広長秀典「謎残る会津の巨城 向羽黒山城」村田修三総監修『日本名城百選』小学館、2008年。
＊石田明夫B「南奥羽における城郭の変遷」第26回全国城郭研究者セミナー『大名系城郭を問う』2009年。

性格についての通説変化

〇蘆名盛氏の隠居城説 …… 早くに**村田氏が疑問視**。「全山要塞という軍事偏重の縄張りのこの城が、そもそも隠居城という目的だけで築かれたものかどうか、疑問が残る。」

〇地域支配の拠点説　……**『保存管理計画書』以降通説化**。巨大な城郭規模、整備された城下町、「巌館銘」の内容。

改修主体の諸説

改修説そのものは、**『保存管理計画書』以降通説化**。

〇段階的改修説　…… 国史跡指定理由・石田氏。

石田氏A：「二重土塁、枡形虎口、石積石垣、礎石と盛氏以降でなければ出現しない遺構も多く存在することから葦名氏、政宗、氏郷、景勝が改修したようだ。」

〇蘆名義広重視説 …… 市村氏。

市村氏：「天正15年３月、義広が蘆名氏に入嗣した事実を想起するならば、佐竹氏側の介入が強化される天正14年頃から、向羽黒山城（岩崎城）を本格的な軍事拠点として使用すべく強化普請された可能性が強い。」

〇蒲生氏重視説　…… 西ヶ谷氏・広長氏。

西ヶ谷氏：「向羽黒岩崎城を今に残る規模にしたのはいつの時代かというと、蒲生氏郷時代をおいてないと考える。伊達氏は黒川在城期は一年弱で築城不可能だ。上杉氏時代も蒲生氏時代に引き続いて整備がなされたものだろう。」

広長氏：「現在見られる遺構の多くは、野面積の石垣の存在から蒲生氏の時のものと思われる。（略）奥羽仕置時の不安定な情勢に対処するため、蒲生氏が改修と一時的使用をくり返した可能性が最も高いと考えられる。」

〇上杉氏重視説　…… 石田氏。

石田氏B：「慶長５年（1600）徳川家康の上杉討伐令に対抗し、上杉氏が構築した防塁と陣は、豊臣系の直線を基本として構築されている。土塁の場合は、直線を基本に、幅約７mの堀が伴い、比高二重土塁に構築されている。（略）向羽黒山城跡や鴫山城跡、九々布城跡にも二重土塁がある。」「1600年の段階に、上杉氏は、領内にある城をことごとく改修した可能性がある。」

改修主体に諸説あり、共通認識が得られていない状況。

２．考古学的な検討

発掘調査の成果 …… **図２**

〇一曲輪の石列遺構と掘立柱建物。柱穴が重複し、３～４時期と推定。→ 比較的長期の使用。

〇二曲輪群の礎石建物。２棟が重複し、少なくとも２時期。→ 遺構にみられる二曲輪の優位性。

○西曲輪群の石積を持つ虎口と石積を持つ半地下式の蔵。
○三曲輪群の平場から坩堝が出土。「この区域の特殊性が考えられる」（報文Ⅲ）
○伝盛氏屋敷では建物などの遺構は未確認。「葦名盛氏の屋敷跡であったとは言い難い状況」（報文Ⅳ）
○城下と想定されている十日町地区では遺構が未確認。

縄張研究の所見

地表面観察による縄張研究は考古学的方法の１つ。【例】未発掘古墳の墳丘比較など。

これまでの研究の多くは、城の構造分析が不十分。村田氏が示した縄張を分析する視点を継承する必要性。向羽黒山城のように規模が大きく複雑な城では、曲輪間の関係を把握するために城道の復元が重要だろう。

○村田氏の解釈と疑問点……**図３**

①大空堀（堀Ａ）に注目。「⑪は前面を土塁で囲み、下の大空堀に相対している重要なポイント」

②主要城道を復元。「第一の幹線」「第二の幹線」「第三の幹線」を想定。

「第一の幹線」：⑥（二曲輪）→⑧→⑨→⑩→⑪→⑫→大空堀東側通過→⑮

「第二の幹線」：⑥（二曲輪）→⑦→⑩→大空堀西側通過

「第三の幹線」：①（一曲輪）→⑱→⑲

③「第一の幹線」「第二の幹線」は二曲輪を起点とするのに対し、「第三の幹線」は一曲輪を起点とするが、①→⑱で堀切に接続する竪堀を通路としていることが不自然。

○石田氏の解釈と疑問点……**図４**

①多くの城道を復元。「第三の幹線」の起点を曲輪二とすることで、村田氏の城道復元で感じられた不自然さは克服されているが、「第二の幹線」の行先を三曲輪方面ではなく「第三の幹線」に接続したことによって、「第二の幹線」の独自性が失われている。

②村田氏が言及しなかった「第一の幹線」の行先を、木橋を想定することによって伝盛氏屋敷に接続する。伝盛氏屋敷＝馬出曲輪と解釈。発掘調査の成果と整合的。

○垣内の解釈……**図５・図６**

①大きく３つのブロックに分けられる。

②堀Ａで方形基調に区画された曲輪Ⅰを中心とし、竪堀などによって画されたⅠａ区・Ⅰｂ区・Ⅰｃが従属する一曲輪ブロック。Ⅰａ区から堀Ａを越えてⅠまでは虎口の連続といった様相で、丸馬出が主体（Ｅ）。一方でⅠｂ区・Ⅰｃ区には明確な遺構がない。

③曲輪Ⅱを中心とし、竪堀などによって画されⅡａ区・Ⅱｂ区・Ⅱｃが従属する二曲輪ブロック。堀Ａ・堀Ｂ・堀Ｃによって外側と画される。Ⅱａ区は虎口の連続といった様相で（Ｆ）、Ⅰａ区から曲輪Ⅰまでと類似。ただし角馬出を意識したような外枡形が主体。Ⅱｂ区・Ⅱｃ区は段々に平場群。Ⅱａ～Ⅱｃ区の随所に石積遺構があり、特にⅡａ区に多い。伝盛氏屋敷のＧは、不定型だが巨大な角馬出だろう。Ⅱｃ区の虎口Ｈも不定型な角馬出で、規模は異なるがＧと似た構造。

④Ⅲを中心とした三曲輪ブロック。外側に堀などの区画施設はない。全体的に粗放な造りで、一曲輪ブロック・二曲輪ブロックとは様相が異なる。

⑤各ブロックの相互関係を示す存在として城道を推定。向羽黒山城の構造的な把握。

「第一の幹線」：①十日町→Ｇ→Ⅱａ区→Ⅰａ区→曲輪Ⅰ。②十日町→Ｇ→Ⅱａ区→曲輪Ⅱ。②は村田氏の解釈をおおむね踏襲するが、城外との接続は石田氏の想定のようにＧを経由。角馬出Ｇの巨大な規模や虎口の連続、石積遺構の多さが特徴。来城者に威儀を示す大手口。

「第二の幹線」：①三曲輪ブロック→Ⅱｂ区→Ⅰａ区→曲輪Ⅰ。②三曲輪ブロック→Ⅱｂ区→曲輪Ⅱ。②は村田氏の解釈をおおむね踏襲するが、曲輪Ⅱの手前で「第三の幹線」と合流。

「第三の幹線」：①三日町→Ｈ→Ⅱｃ区→Ⅰａ区→曲輪Ⅰ。②三日町→Ｈ→Ⅱｃ区→曲輪Ⅱ。②は石田氏の解釈をおおむね踏襲するが、曲輪Ⅱの手前で「第二の幹線」と合流。角馬出Ｈの存在から搦手口。

各城道とも曲輪Ⅰ・Ⅱを起点とし、２つの曲輪に両属。曲輪Ⅰと曲輪Ⅱの並立性。

⑥各曲輪の特徴

曲輪Ⅰ：要害の立地。３～４時期の掘立柱建物。建物の構造は二曲輪ブロックに劣る。

曲輪Ⅱ：二曲輪ブロックで最低２時期の礎石建物。Ⅱｂ区・Ⅱｃ区には家臣団屋敷の伝承。

曲輪Ⅲ：三曲輪ブロックは実質的には城外。三日町の城下との連続性。坩堝の出土から三曲輪ブロックには職人層が居住。「上町」の字名。

⑦曲輪Ⅰと曲輪Ⅱの関係

曲輪Ⅰ・一曲輪ブロック：相対的には長期の利用、掘立柱建物、丸馬出が主体。

曲輪Ⅱ・二曲輪ブロック：相対的には短期の利用、礎石建物、角馬出を意識した虎口が主体。

前者は古い様相を留めているのに対し、後者は比較的新しい様相を示す。

→ 曲輪Ⅱ・二曲輪ブロックを中心に改修。古い段階は曲輪Ⅰ、新しい段階は曲輪Ⅱが主郭。

⑧改修主体の想定

発掘調査の成果……礎石建物は存在するが瓦は不在。石積遺構は存在するが高石垣ではない。

縄張研究の所見……曲輪Ⅰと曲輪Ⅱの並立性。

→以上から、典型的な織豊系城郭とは評価できない。蒲生氏は会津若松城、上杉氏は神指城という具合に、いずれも本格的な本城の普請を行なう。蒲生氏や上杉氏の一時的な利用は否定できないが、向羽黒山城の大規模な改修を、会津若松城や神指城の普請と並行して実施したとは考え難い。**蒲生氏・上杉氏の可能性は低い。**

◎盛隆・亀若丸・義広による改修の可能性。

◎伊達政宗による改修の可能性。

→確認されている石積の様相は、伊達氏の築城と想定される木村館（郡山市）や、亀若丸・義広の築城とみられる柏木城（耶麻郡北塩原村）と似る。その場合、礎石建物が問題となる。ただし、南関東の事例ながら、北条氏照の八王子城御主殿には立派な礎石建物が存在。また、木村館や西山城では虎口の門の事例ながら礎石。城郭建築に礎石を取り入れる事例は南奥でも皆無ではない。

３．文献史学的な検討

築城当初の構造と規模

永禄 11 年の「巌館銘」序の叙述。

①「実城・中城・外構」

「実城」「中城」「外構」の三重構造。

②「塹壁不知幾重、門垣復双櫛歯」

堀や土塁が何重にも廻り、虎口や塀などがずらりと並ぶ。

①・②ともに、現在確認できる遺構の状況と符合。「実城」と「中城」の呼称は、「実」と「中」という中心性を示す「城」が併存していたことを窺わせる。「外構」の呼称は、「外構」とされた区域が「城」の範囲外であることを反映する。「実城」＝ 一曲輪ブロック、「中城」＝ 二曲輪ブロック、「外構」＝ 三曲輪ブロックと解釈でき、二曲輪ブロックと三曲輪ブロックを画する堀Ｂの存在とも整合的。よって盛氏段階の向羽黒山城は、現況とほぼ同規模であったと判断できる。

③「根小屋宿町、向並甍二千余家」

山麓には町場があり、二千軒余りが向かい合って並ぶ。「向並」の表現から、街道（下野街道）に展開した町であるとわかる。盛氏段階の大手は、下野街道のある西側と想定するのが自然で、「第三の幹線」が当初の大手道。縄張の構造から想定した大手道 ＝「第一の幹線」とは符号せず、大手の変更が考えられる。このような大手の変更は、既に国史跡指定理由の中で指摘。変更に伴う城郭の改修が行なわれたはずで、その時期が問題。

改修主体の推定

「伊達天正日記」の天正 17・18 年（1589・90）の条に関連しそうな記事。

◎6 月 17 日の条「其後御西へ御出被成候。御帰に御やうかい近辺御らんし被成候。」

◎6 月 21 日の条「晩かた御やうかい近辺御らんし被成候。」

◎7 月 3 日の条「朝に御やうかい近辺のふしんさせられ候。」

◎7 月 14 日の条「御やうかい近辺、朝に御御らんし被成候。」

◎8 月 26 日の条「朝にむかいはくろへやな（築）御らんしニ御出被成候。」

◎正月 3 日の条「御鷹野むかいはくろへ御出キ候。」

◎2 月晦日の条「あさニ御要害辺直従御覧し候、普請の御作事被仰付候。御帰ニ御馬御覧し候。」

◎3 月 19 日の条「あさニ石普請御さ候。黒川中、近習・家中・まちの者共ニまかり出候而せほい申候。四ツ時分御出キ申候て、被為御覧候。其後御鷹野へ御出候。」

◎3 月 22 日の条「あさニ石普請御座候。普請之所へ御出キ被成候。」

→「御要害」が存在し、そこで「普請」「石普請」。「御要害」は黒川城の一部か、向羽黒山城か。

6 月 17 日の条では「御西」へ出かけた帰りに「御やうかい」を見ており、3 月 19 日の条では「石普請」を見た後に「御鷹野」（正月 3 日の条によれば「むかいはくろ」にある）へ出かける。8 月 26 日・正月 3 日の条では「むかいはくろ」に出かけるも要害・普請等には触れない。よって「御要害」「普請」「石普請」と向羽黒山城とは無関係。伊達政宗の可能性が低いとなれば、残るのは蘆名盛隆・亀若丸・義広による改修の可能性。

4．地域への位置付け

○「杉山城問題」以降における城郭研究の混沌的な状況。城館遺跡の年代比定の難しさ。向羽黒山城については、築城時期には当てはまらないが、改修時期に当てはまる。地域史研究の中に城館を取り入れる方法。

◎**空間論** …… 松岡進氏

「城郭はおよそ何らかの軍事的行動に対応しているかぎり、それぞれが空間を形成する主要な装置となる。そして、城郭を単体で完結させてとらえるのをやめ、地域の広がりを視野において、存在するいくつもの城を空間という局面で見渡すならば、個々の一次的空間が固有の形態で複合し、城郭群として重層的体系を形成している様相もまた見通していくことが可能になってくる。」（「軍事施設としての中世城郭」峰岸・萩原編『戦国時代の城』高志書院、2009 年）。松岡氏の近刊に、『中世城郭の縄張と空間』吉川弘文館、2015 年。

◎**「はまりどころ」論** …… 西股総生氏

「城の占地と縄張りを徹底的に分析して、築城者の意図をあぶりだす。その一方で、城の周辺地域の歴史を整理してゆけば、その場所にその意図をもって城を欲する人物・勢力は見当がついてくる。当該地域の中でこの作業を繰り返してゆけば、城と城とが併存したり対抗した可能性が見えてくるだろう。こうして、地域の歴史の中に城の『はまりどころ』を見つけてあげるのである。」（『土の城 指南』学研パブリッシング、2014 年）。

◎**城館構造論** …… 齋藤慎一氏

「城館の構造を読解し、地理的な状況に関連させると、城館が普請された背景が浮かび上がる。これが可能になれば、城館をとりまく地域社会の諸相がおのずと浮かび上がる。城館を歴史学の史料として活用する道筋である。」（「城館の構造から歴史を読む」『歴史評論』第 768 号、2014 年）。

個々の城郭の縄張を検討した上で、それを地域の中で評価するという視点は共通しており、3 氏の認識は大きく異なるとは感じられないが、松岡・西股両氏は軍事的側面を特に重視する点が特徴。

○蘆名氏を取り巻く政治状況から、向羽黒山城を南奥→会津という地域の中で評価し、位置付ける。

◎天正 13 年（1585）の蘆名氏と伊達氏の関係悪化。蘆名亀若丸。

垣内「伊達政宗の家督相続と蘆名氏」『日本歴史』第 806 号、2015 年。

◎天正 15 年（1587）の佐竹氏と伊達氏の関係悪化。蘆名義広。

垣内「天正一四年の二本松「惣和」と伊達政宗」『中央史学』第 34 号、2011 年。

以上のような政治情勢の変化を受け、**亀若丸や義広の時期に、曲輪Ⅱ・二曲輪ブロックを中心に改修し、現在みられる姿になったのではないか。**関東的な遺構（**図６**）。背景に佐竹氏からの支援。義広の重要性については、既に市村氏が指摘。この時期の改修は、向羽黒山城と柏木城の石積の類似とも整合的。会津盆地の北にある柏木城とのセット性。

柏　木　城 → 会津盆地北東側の山間地に立地。伊達氏との境目の城。蘆名氏当主に直属する城。

黒　川　城 → 蘆名氏の本城。

向羽黒山城 → 本城に対しての詰の城。蘆名氏当主に直属する城。大手口山麓の十日町地区の発掘調査で城下に関連する遺構がみつからないのは、詰の城と解釈すれば了解できる。

立地：会津盆地の南端。会津盆地の広がりを縦深に利用。…… **図１**

構造：城域の北側に大規模な堀などによる遮断遺構。……**図５**

立地・構造ともに北からの侵攻が予想できる伊達氏に対応。

おわりに

○蘆名盛氏段階……盛氏は他界まで在城。黒川城と並ぶ本城。領国支配の拠点。従来説の通り。

拠点の並立性という問題。

◎これまでは、盛氏段階の性格を改修後の段階まで無批判に継続させて解釈。

◎その後における向羽黒山城の性格変化。→ 従来看過されてきた視点。

○蘆名盛隆段階……盛隆は黒川城に在城。向羽黒山城は基本的には未使用。

◎この段階までの蘆名氏は伊達氏と協調的。

○蘆名亀若丸・義広段階……亀若丸・義広は黒川城に在城。伊達氏と敵対的。柏木城とのセット性。

◎伊達政宗の桧原築城が蘆名氏に与えた衝撃。

◎軍事的属性の強い両城が、ともに石積を多用する共通性。

◎どのような城に石積を取り入れるのかを考えるヒントになるかも。

《注》本報告は、垣内和孝『伊達政宗と南奥の戦国時代』（吉川弘文館 2017 年）所収の同題論文を骨子に、その後の知見を加味して構成した。

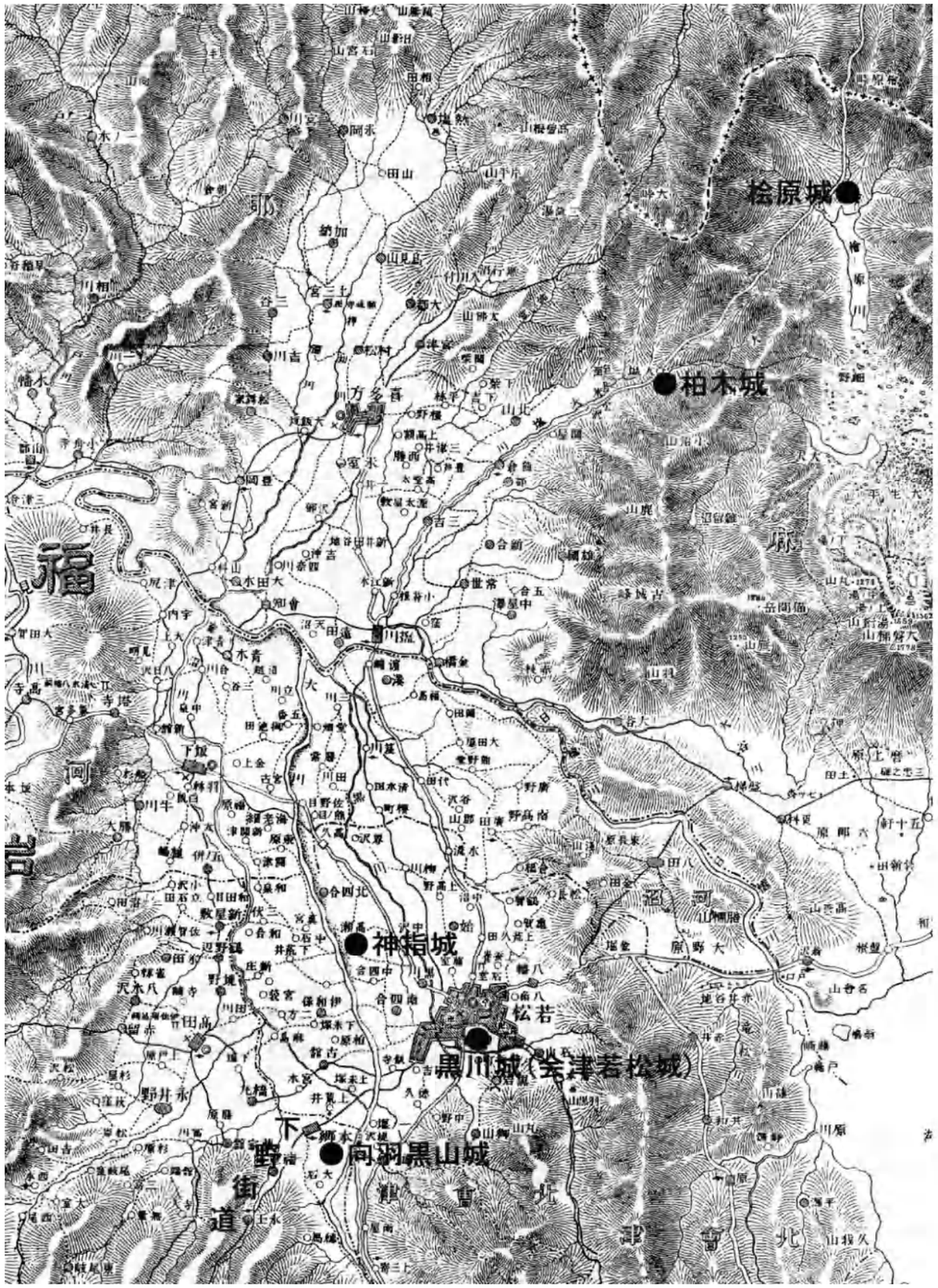

図１　向羽黒山城の位置

図２　向羽黒山城測量図（会津美里町教育委員会作成図に加筆）

図３　向羽黒山城縄張図（齋藤慎一氏作成図に村田修三氏推定城道を加筆）

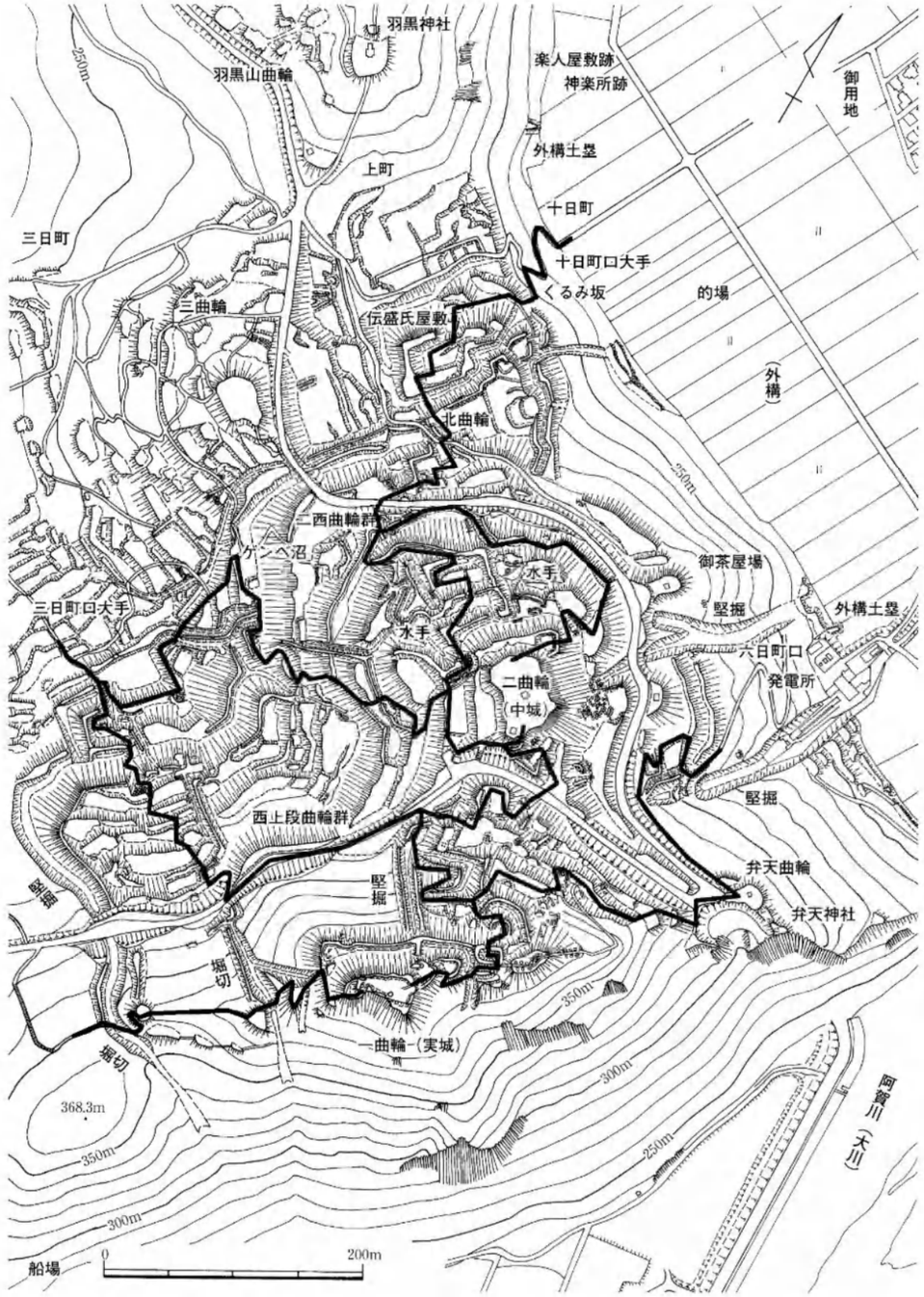

図４　向羽黒山城縄張図（石田明夫氏作成図に加筆）

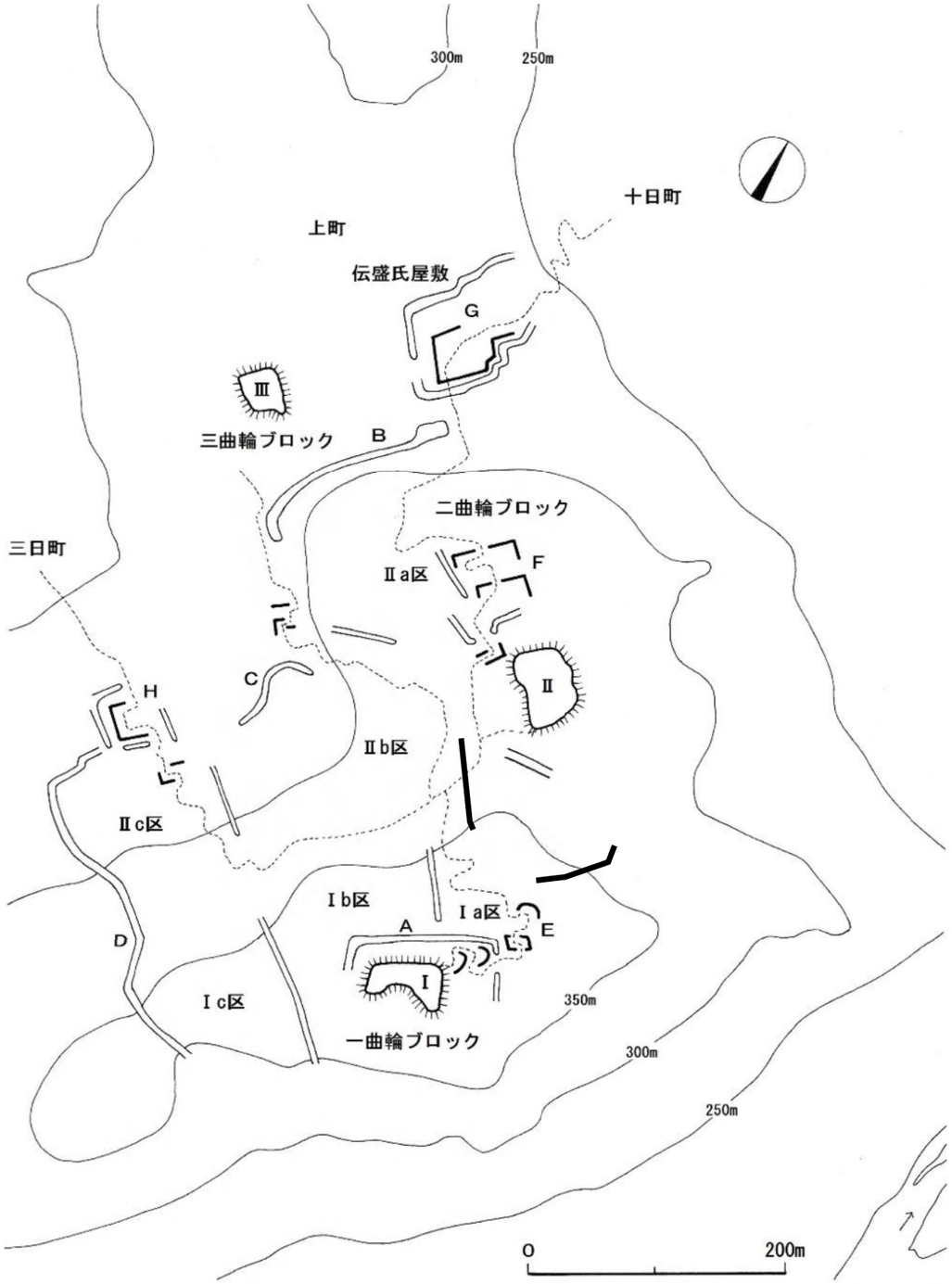

図５　向羽黒山城概念図

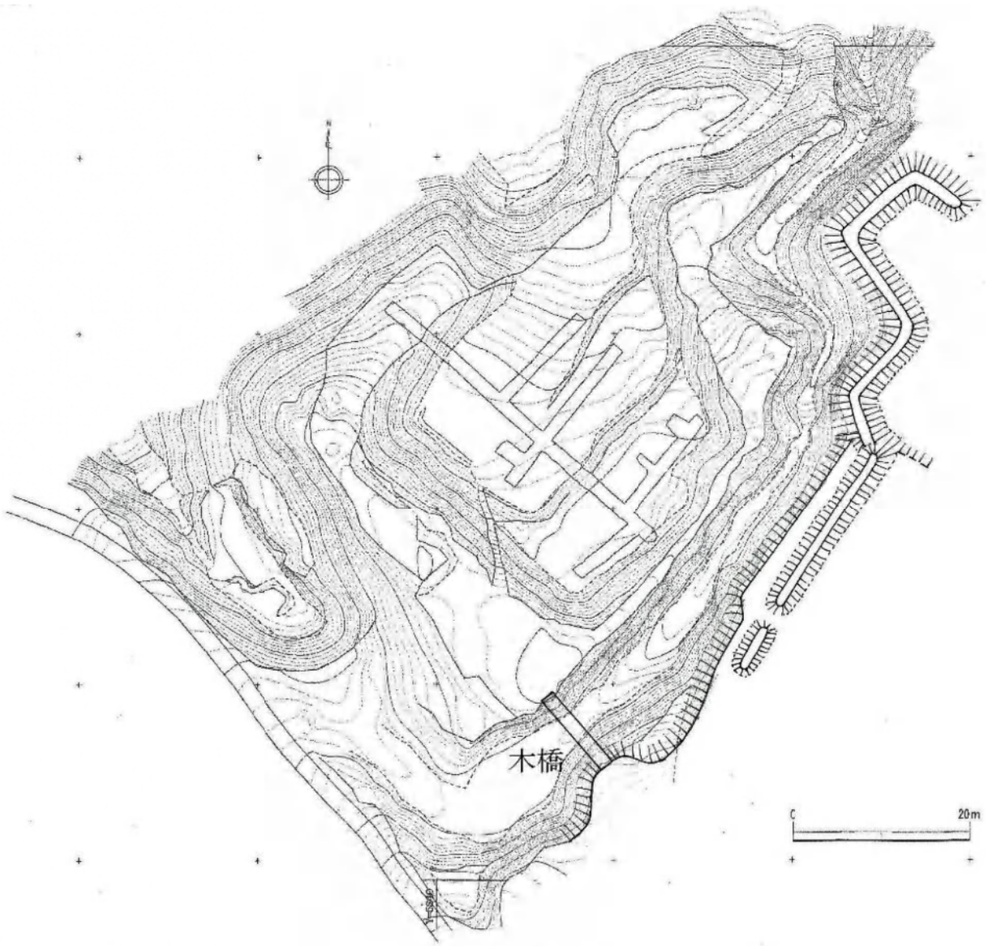

図６　伝盛氏屋敷（会津美里町教育委員会作成図に加筆）

挿図出典

図１：　基図は平凡社日本歴史地名大系『福島県の地名』特別付録

図２：『向羽黒山城跡Ⅴ』

図３：『中世城郭事典』第１巻

図４：　石田「東北南部における戦国期の城郭について」

図５：　垣内作図

図６：『向羽黒山城跡Ⅴ』